

アナトミア

青春の君たちへ



抱いてほしい
野放図な欲望を

文芸学科専任講師

小神野真弘先生

情報を正しく伝える

小神野先生: 私の専門はジャーナリズムで、人に正しく物事を伝えるということを教えています。私達が原始人だった時期から、人類って隣人から隣人へ、友人から友人へ、もしくは親から子とか家族の間で大事な情報を伝え合うことによって繁栄してきたところがあって、それは今も変わっていないと思います。でも原始人だった頃に比べると、現代は社会がすごく複雑になっていて、情報を伝えることがすごく難しい。難しいよねっていう前提に立ったうえで、きちんと正しく情報を伝えるためにはどうすればいいのか、というのがジャーナリズムの問題点であり、そのことについて研究しています。今を生きる私達が、世界をとらえる時の解像度や考え方、仕草や仕方とはどのようなものなのか。それから10年後、20年後、もっと欲張れば100年後ぐらいまでに何を残していけるのか。家族を作って子孫を残していく人間もいるだろうし、そういう人達がハッピーに生きていくためにはどうすればいいんだろう。ジャーナリズムというのはなるべく射程を長くとりながらそういうことを考えていく分野のかなと思います。

社会の見方を変える

小神野先生: ジャーナリズムが扱うのは社会問題だけではなくて、なんらかのカルチャーであったり、社会問題として顕在化していないけど皆が漠然と思っていることだったり。それから例えば昆虫食とか、10年後20年後にはごく当たり前のことになるかもしれないもの。そういったものの可能性な

どについて読者にわかりやすく、楽しく伝えることを軸足としています。ゼミでは、なにか1つのテーマを設定しディスカッションをしています。今年度のゼミでは、「難民を受け入れるべきか受け入れざるべきか」というテーマで強制的に反対派と賛成派に分かれてディベートをしました。難民と聞くと、なんとなく受け入れない方がいいのかなと思うけれども、無理やり難民賛成派に割り当てられれば、どうにか難民を受け入れるメリットを探さなくてはいけない。そうすると社会と物事の見方がすごく立体的になる。自分と全然違う考え方をする人間がいることに気づくし、その人がどういう根拠をもって発言しているのかを考えざるを得なくなる。世界に対してどうコミットしていくかを考えなくてはいけなくなるわけですけど、でもこれって他分野の学問も同じことだなんて思います。

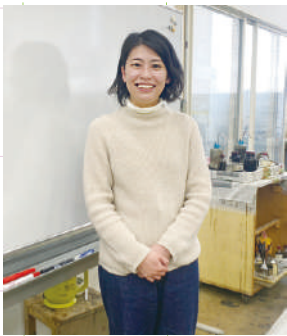
学生1: 基本的には座学を一方的に受ける形にはならないスタイルで、行動的な授業になっています。自分はジャーナルというのは、行動が絶対に必要なものだと思います。取材に行って自分の足で動く、最後には自分で書く力が必要なので、実践的な環境にはなっているのかなと思います。だからディスカッションみたいな言語間の交流は、非常に大事な場なのかなって、やっぱり最後は言葉なので文字なのか音なのかの違いはあるんですけど、とにかく経験は積みやすいです。

学生2: ディベートをやった時に自分達で調べて初めて知ることの方が多かったので、自分から知識を求めにいくこともジャーナリズムの一つで、興味があることないことは、それぞれあると思うんですけど、人に伝えるためには必ず下調べが必要だと思います。それをちゃんと行うことがジャーナリズムの一環だと学びましたね。

旅へ出て、野放図であれ

小神野先生: 旅をした方がいいよって話をよくしています。なぜ旅なのかというと、自分が普段慣れ親しんだ安住の場所から離れて、知らない所に行く。行き先はバブアニューギニアでも日本海側の人が少ない村でもどこでもいいんですけど、状況を変えるだけで当たり前としているものが崩れると思います。私達が普段当たり前だと思っているものの、絶対に身の回りにあるものだと信じて疑わないことに決断とか思考をどれだけ委ねてしまっているかを気づききっかけになるんですよね。それをせ

偶然性―― 版画の面白さ。



美術学科専任講師

大橋朋美先生

アットホームな空間で。

大橋先生: 西棟3階の版画室で、学生たちに版画を教えています。大学も大学院も日藝で、非常勤講師として中学と高校に勤めた後、また日藝へ戻ってきました。生粋の日藝人みたいになっていきますね。(笑) 1年生から院生まで、総勢60人近くの学生がこの狭い空間で授業を受けています。全員がこの版画室に集まって何かをやることはありませんが、お互いに距離感が近くて、みんなとよく對話させてもらっているなど感じます。
学生1: 先生たちはみんな、お母さんとかお姉さんみたいな距離感で相談を受けてくれて、先生っていうより親戚に近いですね。温かい先生が沢山いらっやいます。

ずに生きるというのはすごく不自由で億劫なことだし、頭をめちゃくちゃ使わなくちゃいけない。日常生活では快適さを求めて物事の取捨選択をしてしまっても、それを乱してくれる。旅すること、人に会うことは、外的要因にどれだけ接して刺激を受けるかを凝縮したもの。言葉や食べ物、文化など、日常とは違った環境に放り込まれる。そこで生命体としての底力みたいなものを試されるし、世界がどれだけ多様なのかを本当に体感できるから旅に出てほしいですね。日藝生は、何者かになりたいという野望みたいなものと、何者にもなれないかもしれない焦燥感みたいなものを同時に抱えている人が結構多いんじゃないかと思っていて、それはすごく愛すべきことだなと思う。焦燥感とか何者かになりたいみたいな願望がちっと違った方向に出ちゃう人もいるんだけど、それもまたすごく好ましいし、生きているってそういうことなんですよね。日藝って特別な場所で、せっかく日藝に来たのであれば、そういう野放図な欲望を抱いてほしい。日藝生を見ていると人間である面白さを非常に感じますよね。人間捨てたもんじゃないなって思います。

(取材: 中川、鶴岡／構成: 中川)

手から離れる、その瞬間が面白い。

大橋先生: 版画にはいろいろな種類があるんですが、その中でも凹版というものを専門的に教えています。版画と出会ったのは大学2年生の時です。私が学生の頃は2年生で絵画専攻か版画専攻かを選んだんです。そもそも版画家になろうと思って版画専攻を選んだわけではなく、大学の設備をもっと利用したいと思ったことがきっかけなんです。版画の工程は特殊で、専用の施設がある場所じゃないと学べないものなので。版画って準備するものがすごく多くて、正直今でも版画の工程って好きじゃないんですけど、それでも学んでいくうちに版画の魅力にハマっていききました。版画って、最後の刷り上がった瞬間が一番楽しいんですよ。絵と違って完成形がすぐ目に見えるわけじゃないんですが、でもそこが良い。一度自分の手から離れて、思っていたものと違うものができた時の喜びがあるんですよね。偶然性の面白さ。それを楽しみ続けるために作品を作り続けています。

学生: 版画専攻の学生って、受験前までは絵を描くことをしてきた人が大半だと思うんですよ。絵を描くのと版を刷るのとでは全くやるのが違うんですが、一旦手を離れるっていうことに面白みを感じているから、皆ここにいるんじゃないかなって感じます。
大橋先生: そこに楽しさを見出せなかったら続けら

繋がり大切に

サポートセンター

長部純平さん
松崎泰樹さん



より多くの学生のサポートを

松崎: サポートセンターは、元々学生課と就職指導課に分かれていました。学生課では学生生活を送るうえでの事務手続きやサポートを、就職指導課では就職活動でのお手伝いをしていました。そこを一つにすることで、これまで以上に学生生活で困ったことや悩みがあったら気軽に来てほしい、そういう場所があるのだということをより多くの学生に知ってもらいたいという意味を込めて、去年の夏からサポートセンターという名前になりました。
長部: 事務的なことを行うのが事務局の基本的な役割ですが、学生が課外活動などでやりたいこと

れないと思いますね。やっぱり直接描く方が楽し、時間だって版画の方が数倍かかるし。でもその面倒臭さを楽しめる人達が残ってやっていける。今は入学する前から専攻を選ばないといけないで酷な部分はありますが、絶対に版画で卒業しなければいけないわけではないので、ここで学んだことを自分の表現の何かに繋げてもらえたらいいなって思います。版画って、思ったよりいろんなことができますし。パレンを使って、彫って刷るっていうThe版画のイメージ。そのイメージが180度変わったからというのも、版画を好きになった理由かもしれないです。版画っているんなことができるんだな、って表現の幅の広さに驚いて。もう少し知りたいなって、興味を持って。実際学生の中には、版画をやりたいというより、ペン画とかイラストとか線で描く物のイメージで版画を選んだ人が多く居るんですよ。入学時にすでに版画をやっていたという学生は比較的少ないかもしれないです。
学生: 自分は入学してすぐに「版画なら一通りのことができるよ」って言われた時に、描いたり彫ったり、刷るにも多種多様な技法があるところに魅力を感じました。技法の特色が一つひとつ全く違うので、技法を覚えて様々な表現方法を試せることが今本当に楽しいです。

大橋先生: 同じ原画でも、技法が違えば作品が大きく変わってきますもんね。

をするために、授業とは別のところをサポートすることも学生課の仕事です。やってみよう自分達で蓋をせずに、気軽に相談に来てください。

やるかどうかは自分次第

松崎: 業務的には学生の就職活動についての悩みやわからないことに答えたり一緒に考えたりするということが多いです。就職関連と言っても、How toだけを教える場所ではないので、自分で考える癖をつけてもらえるように意識しながら話している部分があります。
長部: 主に、奨学金や留学生関係の手続き、授業中や課外活動での怪我による保険の相談で学生が窓口に来ます。手続きはもちろん、他により良い取扱いがあればアドバイスもします。また、運動部連盟や文化部連盟のサークルや日芸祭実行委員で何かをやるという学生は窓口によく来るようになるので、話をすることが多いです。日芸祭は、クオリティを気にせずに「自分達のやりたいこと」「くだらないこと」をやる学生がたくさんいてもいいと思います。是非、何かの企画で参加してください。
松崎: サポートセンターでは相談にも乗りますが、

どれも面白い。悪いものは一つもない。

大橋先生: 中学と高校ではシステマティックに採点しないといけないんですが、大学は自分の表現を突き詰めて研究する場所なので、作品を単純に上手い下手と評価することはできませんね。これは私の視点なので正解かどうかは分かりませんが、作品として今後どう伸びていくかっていう見方をしています。しっかり考えて自分なりに悩みながら作ったものには、悪いものは一つもないと私は思っているの。もちろん作りが浅い時もありますが、基本的にどれも面白いなと思ってます。その面白さを自分たちで気付いてもらえるように、アシストしたいなとも思っていますね。在学生に対しては、視野を狭くせず他専攻や他学科の学生とも上手く絡んで欲しいです。コロナの影響が大分落ち着いてきて、これから交流が出来る時代になると思うので。特に版画ってコラボしやすい専攻かなって私は思っていて、他学科の学生と共に作品を作って欲しいなって思っています。文芸学科の学生と一しょに本を作ったり、写真学科の学生が撮った写真を版で刷ってみたいとか。そうして大学生生活で得たものを大切に、自分の仕事や制作などに繋げてくれると嬉しいですね。

(取材: 太田、鶴岡、中川／構成: 太田)

あくまでやるかどうかは自分次第なので、上手く大学を使ってください。

日藝生へ

松崎: ただ単位を取って卒業するだけでも学生生活は送れますよね。でも、せっかく芸術を学びたい、やりたいことがあるという学生が集まっているから、その中で少しでも人生を豊かにしたり、色々な経験を積んでもらいたいです。できるだけ相談に来てくれた人には応えたいと思いますし、対応してほしいことがあればぜひ言ってください。コロナ禍を経て、一緒に自分達も成長していきたいと感じています。例えば、一人暮らしで環境が変わったりして不安だという時などに寄り添えるサポートセンターでありたいです。
長部: 積極的な4年間にしてほしいですね。何かを聞きに来る時に、どこのカウンターかは気にしないでいいと思います。気になったりわからなかったりしたら、どこからでも聞いてみてください。それが教職員との繋がりになります。人との繋がりや、4年間で何をしてどんな人になったかというのは、自分の中で絶対に生きていくので、自分らしい4年間を送ってください。(取材: 中川、太田、鶴岡／構成: 鶴岡)

クリエイターの輪

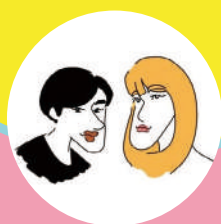
The Circle of Creators



コンビ名

自主創造

グレーブカンパニー所属
結成 2020年12月25日
デビュー 2022年8月3日



コンビ

YouTube: 自主創造 / Twitter: @Jishusozo / Instagram: @jishusozo

個人

Instagram: あい → @jishusozo_i / トビー → @tobi_tobi_toby



日大生なら誰もが聞いたことがある
「自主創造」で出会った二人。
お笑いが一番楽しいと語る二人に、
活動のきっかけやお笑いの魅力を聞いた。

トビー (演劇学科舞台構想コース3年)
日藝を選んだ理由: 一番お笑いに近い学部が日藝だったから

あい (演劇学科舞台構想コース3年)
日藝を選んだ理由: 家が近いから日藝にきた

●「自主創造」のお笑い活動はどんなもの?

あい: 主に舞台上でコントを披露しています。毎月第4日曜日に事務所ライブがあって、そこでいいネタができればYouTubeに載せています。トークライブは定期的に、時々漫才もするようにしています。
トビー: 事務所に入ってから、オーディションにも参加しています。ネタは、あいさんが書いているので、あいさんが面白いネタを思いついたら楽しく漫才をするみたいです。

あい: モラルのないことを思いついたら、形にしてみるっていう仕事ですね。面白いことってモラルがないことだと思っていて、そこを極めていくって感じです。

トビー: 女の子のアイドルを見ていると「頑張れ!」って思うよりまず先に「うわすごい! 彼女達をモチベーションに生きていこう!」って思えるアイドルが好きなんです。そういう存在になりたいなっですごく思っています。最近特に、だれかが私達のコントを見て「このふたりがいるから頑張れる!」みたいな活力になりたいなっと思っています。

●コンビ結成のきっかけは?

トビー: 出会いは、「自主創造の基礎」という授業でした。ちょうどコロナ渦で、オンラインで初めてGooglemeetであいさんと知り合いました。班の中で、同じ舞台構想コースだったのは、あいさんだけだったんです。初めて登校した時にあいさんが「こんにちば」って挨拶してくれて、「あ! あの時のあいさんですね!」って。話していくうちにお互いにお笑いが好きだってわかったんです。私は高校生時代にハイスクールマンザイっていう大会で後輩と健全にお笑いをやっていたんですけど、あいさんは変な人とお笑いをやっていて、ちょっと心配になったのでコンビを組むことにしました(笑)。

あい: Twitterで「#相方募集」というのがあって、そこで捕まえた10歳上のUber Eats配達員の男性と組んでいました。実際に会ってネタをやってみたら凄く面白くなって(笑)。解散して次にイタリアンのシェフと組みました。でもシェフが地方在住だったのであまり会えないでいた時にトビーさんと出会いました。

トビー: シェフから分捕りました(笑)。

あい: YouTubeでネタ動画を観ることがずっと好きで、そのうち私もネタが書けるんじゃないかと誤解しまして、その結果ずるずるお笑いを目指し始めましたね。

トビー: 私は、両親がお笑いが大好きで、生まれた時からお笑い番組がずっと流れていたの、日常に笑いが常にありました。祖父母にモノマネを披露したら、笑ってくれて。それで人を笑わせるのって楽しいなって思いました。夢は幼稚園生までプリキュアでした(笑)。でも小学校に入って無理だと気づいて、じゃあお笑いやってみたいなって思いましたね。

● あいさんはコント中あまり声も顔も出さないことが多いのですが、なぜですか?

あい: 失敗したくないんですよ。漫才は失敗しても「囃んでるやないか」って言ってフォローできるんですけど、コントはそんなことをしたら冷めちゃうので、ミスれないんですよね。スベる恐さですね。それでせつかく声を出さないなら、大道具になっちゃおうと思って。演劇的発想ですね、これは。たしかにこのような形態はあんまりないと思います。ないからこそ、テレビのオーディションといった面白いものより、新しいものの世界では通ることが多い。だから、誰もやってないことをやろうと。片方が喋らない女をやろうって。

トビー: そうですね。あいさんが喋るネタもあるん

ですけど、そうじゃないネタの方が受けやすくて。やっぱりお客さんも、「うわ、新しい」って思いながら見てくれているのかもしれない。

あい: そうですね、変なことしたものの勝ちですね。

トビー: 新人発掘されやすいかもしれないです。

●今後の展望はありますか?

トビー: 賞レース! M-1とかキングオブコントを目指すこと、それから今はYoutubeもあるので、それも頑張りたいです。あとは年末の特番でネタができればいいですね。「ZOO-1グランプリ」と、坂上さんの動物王国に出たいです!

あい: 最終目標はキングオブコント優勝ですかね。同じ事務所のサンドウィッチマンさんがM-1を、しんいちさんはR-1を獲っていて、優勝者が出ていないのはキングオブコントだけらしいので、グレーブカンパニー史上初の優勝者になりたいです。

●来年の日芸祭とかには……

トビー: あー、出たい! 出てみたいです。

あい: オファーがあればぜひ出たいですね。

トビー: 「自主創造で一す」って言えば、日大生はドゥ! っとなるんですよ!

あい: 身内ネタが使えますね。

●最後に、新入生と在校生に向けて一言おねがいます

トビー: まずは入学おめでとう。日藝は先生が活動を応援してくれるから、やりたいしたいことがあったら、積極的に活動して、まずは日藝の中で有名人になるみたいな、そういう作戦もありかと思えます。

あい: なんでも面白がれる学校なので、臆せず、楽しいことをやってください。

(構成: 中川、山口)

部活やろうぜ!

落語研究会



どうも! 桐崎亭救世主と申します。一席おつきあいの程よろしく願いたします。私達落語研究会は日藝の中でも歴史の長い、伝統あるサークルです。しかしながら、昔は大人数で活動していたにも関わらず、現在部員数が危機的状況にあります。そこで! ……ここからは本邦初公開の情報なのですが、落語研究会は現在定席を目指して定石を外した部員も募集しています! ……あ、ここは一応笑うところですよ! 説明しておきますと、これは“ジョウセキ”がかかった大変

Twitter:@NUart_rakugo



高度なギャグです。すね……。 (一時間後) ということで、私達は落語研究会の定席として江古田寄席を定期的に開催することを目論んでいます! しかし! 部員が足りない! 日藝にはお笑い感度の高い人間がこんなにいるのに! 一昔前は、落語は老若男女誰もが楽しんでいた娯楽です。貴方が好きにならないはずがありません。それでも落語が苦手という方は、色物という形でコント

や漫談などでの参加も歓迎しています。笑いたい、笑わせたい、笑われたい……という崇高な精神をお持ちのそこの貴方! ここまで読んでくれた奇特定の貴方! それでも笑わせるのはちょっと……という貴方は、笑いに来ただけでも構いません! 落語研究会で貴方をお待ちしています!

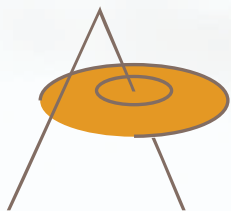
Blue Art Jazz Orchestra

Blue Art Jazz Orchestraは1971年から続く伝統ある音楽学科有志団体です。コロナの影響により、活動は一時中断され、50周年を迎えることができず悔しい思いをしました。3年ぶりに復活するべく、企画し

始めましたが、すぐ動き出せたわけではなく、練習場所の確保や公演の感染対策など、コロナとの両立が難しく、何度も復活を諦めかけました。しかしこの代でBlueを終わらせたくないというメンバーの強い想いと、先生



方や仲間、応援してくださるファンの皆様の支えのおかげで今回の復活に至りました。そして総勢700名のお客様に来ていただくことができました。公演後には、お客様の笑顔やあたたかい拍手、「来年も聴きに來るね」とのお声を頂き、本当に復活させて良かったと、Blue一同心から思っております。そして、私達と一緒に活動してくれる新メンバー大募集です。ぜひ公式Instagram (blueart_nuart)、Twitter (@blueart_nuart) にてお声がけください!



050

After Century

Art Campus

Photography
Cinema
Fine Arts
Music
Literary Arts
Theatre
Broadcasting
Design

